

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370251

研究課題名(和文) 広瀬旭荘の伝記的研究

研究課題名(英文) The biography study about HIROSE, Kyokusou

研究代表者

徳田 武 (Tokuda, Takeshi)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員

研究者番号：20139447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近世後期に活躍した漢詩人広瀬旭荘について、その伝記事項および周辺の文人たちとの交流の実態を究明し、もって変動する幕末の世相をうかがうことにある。旭荘の漢文日記『日間瑣事備忘』および書簡を調査・解読することによって、春日載陽、筑井崑陽、鈴木春日、吉田松陰らとの交流の様子を明らかにした。また、旭荘の攘夷思想が吉田松陰と共有されていることも知ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is investigating biography and companionship of HIROSE, Kyokusou who is the famous poet by classical Chinese in second half of Edo period, and analyzing social conditions of the late Tokugawa period. By investigating "Nikkan sajibibo", HIROSE, Kyokusou's diary written by classical Chinese, and his letters, it became clear that Kyokusou kept company with Kasuga saiyou, Chikui konyou, Suzuki shunjitsu, Yoshida shoin and so on, and Kyokusou shared the exclusion of foreigners thought with Yoshida shoin.

研究分野：日本近世文学

キーワード：和漢比較文学

## 1. 研究開始当初の背景

近年、江戸漢詩文の研究の重要性は認知されてはいるものの、いまだ江戸漢詩研究者の数は多いとはいえない。また、その資料読解が困難を極めるため、代表的詩人の作でさえ、十分に研究されているとはいいがたい状況にある。

とりわけ、江戸末期に活躍した広瀬旭荘は、清末の大儒俞樾より「東国詩人の冠」(『東瀛詩選』二十三)と称されるほどの人物でありながら、いまだ本格的に研究が進んでいないといえる。旭荘の詩作は『梅墩詩鈔』4編12巻に収められており、これまで、岡村繁訳注『広瀬淡窓 広瀬旭荘』(岩波書店、1991年)や大野修作訳注『広瀬旭荘』(研文出版、1999年)において注釈が施されてきたものの、いずれも龐大な詩集中のごく一部分の注釈に限られたものであった。なかんずく、旭荘研究の基本となる、詳細な伝記研究については、未着手ともいべき状況にある。

そこで、広瀬旭荘の詳細な伝記を作ること急務と考え、雑誌『江戸文学』(ペリカン社)誌上において全12回にわたる「詩人広瀬旭荘伝」を連載したり、あるいは『江戸風雅』誌で旭荘周辺の文人交流ネットワークを究明したりと、過去20年にわたって旭荘研究の成果を発表し続けてきた。

こうした研究活動を通じて、申請者は『日間瑣事備忘』に注目するようになった。この書は、天保3年(1832)から没する5日前の文久3年(1863)8月12日にかけて、すなわち旭荘26歳から57歳までの31年間にわたって、漢文で書き続けられた詳細な生活記録であるとともに、同時代の世相を知る重要資料である。旭荘自身が「吾が一生の精神は日録に存す」(亀谷省軒「広瀬旭荘伝」『省軒文稿』二)といったように、旭荘が畢生の精力を尽くして、後世に伝えようとした一箇の事業が、この『日間瑣事備忘』全167冊なのである。

この貴重な資料集の稿本は、生家であった日田市の広瀬先賢文庫に所蔵されており、それが近時、『広瀬旭荘全集』(思文閣出版)第1巻から第9巻までに影印収録された。しかしながら、現在、『日間瑣事備忘』が十分には活用されていない状況にあるのは、やはりそれが漢文、しかも白文のまま影印されているからであり、またそれがあまりに龐大な分量であるためだろう。本書を読み解くことによって、旭荘の伝記研究をより詳細に行えるだけでなく、旭荘と接触した文人との交友の様子をもうかがうことができる以上、一刻も早く『日間瑣事備忘』を利用しやすいかたちに整理する必要がある。

すでに「広瀬旭荘の足利学校行」(『江戸風雅』第3号、2010年11月)や「広瀬旭荘と

江戸」(『江戸風雅』第7号、2013年1月)において、『日間瑣事備忘』を活用し、旭荘の伝記事項や文人らとの交流の様子を詳らかにしており、この研究方法が有効であることを実証している。

また、旭荘およびその周辺の文人の伝記事項を研究する上で、おびただしい数の書簡にも目を向ける必要がある。旭荘の書翰は長寿吉・小野精一編『廣瀬淡窓・旭荘書翰集』(弘文堂書房、1943年)に紹介されてはいるが、文言の脱落や誤植などが目立ち、いまだ十分とはいえない。そこで申請者は、『明治大学教養論集』242・268・279・286・322・362号にて、断続的に旭荘の未紹介詩文・書簡の翻刻・訳注を行うなど書簡研究にも従事してきた。旭荘の伝記研究を遂行するには、『廣瀬淡窓・旭荘書翰集』に大規模な改訂を施し、利用しやすい形で公開する必要がある。

## 2. 研究の目的

以上、研究の背景を踏まえ、次の4点を研究目的とした。

- (1) 広瀬旭荘の『日間瑣事備忘』の中から重要箇所を選定し、書き下し文および訳注をほどこす。
- (2) 旭荘書簡を正確に翻刻・注解することで、旭荘の伝記研究を推進し、旭荘と交流をもった文人たちの伝記を補綴する。
- (3) その上で、『日間瑣事備忘』の人名索引・書名索引・事件索引を作成する。
- (4) 上記の研究を通じて、変動する幕末の世相を究明する。

こうした研究は、文学研究、歴史研究、美術史研究といった複数の領域に関わる研究者の便に供するであろう。

## 3. 研究の方法

研究の目的で示した4点について、下記の方法によって研究を推進する。

- (1) 旭荘が著した漢文日記『日間瑣事備忘』から伝記事項や重要事件が補える条を抽出し、これをき下した上で注解を加え、さらに『日間瑣事備忘』の人名索引・書名索引・事件索引を制作する。
- (2) 誤刻・脱文の目立つ『廣瀬淡窓・旭荘書翰集』について、書簡原文コピーをもとにして、旭荘の書簡を改めて翻刻し直し、これに注解を加える。
- (3) 上記(1)・(2)の作業を通じて、旭荘およびその周辺の文人たちの伝記事項を補綴し、幕末動乱期の世相史を浮き彫りにする。

## 4. 研究成果

### (1) これまでの研究の整理

研究を推進する上で、これまでの研究成果を整理する必要から、『江戸文学』(ペリカ

ん社)に連載していた「詩人 広瀬旭荘伝」を基に、主に旭荘の十七歳から二十一歳までの時期を年譜化し、「広瀬旭荘略年譜」として整理し、公表した。なお、これまでの成果に加え、旭荘幼少期と菅茶山訪問の記事を加えている。

また、旭荘の伝記研究としてまとめたものに、西村天因著『亀門の二広』(『大阪朝日新聞』)がある。この古典的著述について、旭荘の部分を取り上げ、校訂および施訓を付して、「増訂西村天因著『亀門の二広』広瀬旭荘」として発表した。

ほかに、『日間瑣事備忘』が、亀谷省軒によって初めてその価値が認められ、ついで牧野藻洲や西村天因によって顕彰が継続されてゆく様相を展望した、「広瀬旭荘『日間瑣事備忘』の顕彰：亀谷省軒・牧野藻洲・西村天因に於ける」を作成した。省軒に関しては、あまり伝が知られていないので、旭荘との交渉が細大漏らさず分かるように『日間瑣事備忘』から関連記事を網羅して、それを訳し解説することに務めた。また、その時期は、池内陶所が暗殺されるなど、幕末の物騒な盛りなのであるが、そうした世情が旭荘にどのような影響を与えているかについても考察している。

なお、岡鹿門は『在臆話記』にて旭荘に関する情報を記録しており、それが『備忘』の成立状況を善く説明し、その価値を早くも顕彰しているが、『在臆話記』の広瀬旭荘記事：『日間瑣事備忘』の顕彰において、その様子を追尋し、さらに、『話記』の記載を『備忘』のそれと突き合わせることによって、『話記』の誤りを指摘する。『話記』に記された旭荘の詩を読み解いて、文久元年当時の旭荘の心境を明かすことをも試みる。さらには『話記』の河野鉄兜と旭荘の交友の記事を補訂した。

## (2) 文人交流の様態と旭荘の伝記研究

『梅墩詩鈔』第四編の末尾に長い詩を寄せている筑井清という人物が如何なる者であるのか、旭荘とどのような交渉があった詩を寄せるようになったのか、なぜ旭荘は彼の詩を自分の詩集に掲載したのか、という、基本的な問題に就いて、その詩や『日間瑣事備忘』などを資料として検証し、「広瀬旭荘と筑井崑陽」としてまとめた。

また、浪華の名医たる春日載陽の『載陽遺稿』には旭荘に与えた漢牘が見いだせる。それに基づき、彼と旭荘の交渉のありさまを『日間瑣事備忘』などをも利用して検証した、「広瀬旭荘と春日載陽」を公表した。

「広瀬旭荘と鈴木春山(一)」では、旭荘が鈴木春山とどのような交流を持っていたのか、これについて『日間瑣事備忘』および『在臆話記』の記述をもとに明らかにし

た。

「広瀬旭荘の『観瀑図誌』に就いて」では次のような知見を発表した。『観瀑布図誌』(文久三年跋)は、伊賀名張の西南にある景勝地、赤目四十八瀑についての詩文画集である。該書には、広瀬旭荘の五言絶句十二首が収められているが、これらは『旭荘詩鈔』・『旭荘遺稿』未収録の作品群であり、旭荘研究者にも知られていない、貴重なものである。そこで、こらら新出の漢詩に訳注を施した上で、旭荘詩が該書の図画および漢文とを参考にしつつも、時に想像によって制作された様態を考察した。また、『日間瑣事備忘』をひもとくことで、旭荘がかかる作品群を制作した背景も明らかにし得た。それによると、旭荘は万延元年十一月七日に依頼を受け、多額の潤筆料と引き換えに当該十二首を制作したことがわかる。

「広瀬旭荘と吉田松陰」では、まず『日間瑣事備忘』に見える吉田松陰関係の記事に注目し、旭荘が松陰をどのように観ていたかを考察した。次に、松陰が旭荘の長篇古詩「桑維乾鉄硯詩」を愛読した逸話を取り上げ、愛読した理由を分析して、それに松陰が抱懐するのと同様な攘夷思想がほの見えている点を指摘し、政治的意見を表明することを極力憚っていた旭荘がこの場合には珍しくも一端を漏らしていると述べて、旭荘の攘夷思想という新しい視点を齎したものである。

## (3) 書簡調査による伝記研究

日田市の広瀬資料館に所蔵される旭荘書簡の内、息子の林外と淡窓の養子青村に宛てた物を翻字し、さらに年時考証を施した上で、時間順に配列した「広瀬旭荘の林外・青村宛て書簡」を発表した。これは長寿吉・小野精一編『広瀬淡窓旭荘書簡集』のそれを改訂したものであるが、旭荘が幼い孝之助(林外)らの子供に暖かい愛情を注いでいる事が知られるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

徳田武・長田和也・山形彩美「増訂西村天因著『亀門の二広』広瀬旭荘」(『江戸風雅』9、2014、11-55、査読無)

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020119808>)

徳田武「広瀬旭荘略年譜」(『江戸風雅』9、2014、56-80、査読無)

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020119817>)

徳田武「広瀬旭荘と春日載陽」(『江戸風雅』9、2014、81-86、査読無)

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020119823>)

徳田武「広瀬旭荘『日間瑣事備忘』の顕彰：  
亀谷省軒・牧野藻洲・西村天囚に於ける」  
（『江戸風雅』10、2014、3-32、査読無）

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020272463>）

徳田武「広瀬旭荘と筑井崑陽」（『江戸風雅』  
11、2015、40-58、査読無）

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020515189>）

徳田武「広瀬旭荘と鈴木春山（一）」（『江戸  
風雅』12、2015、26-43、査読無）

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020653312>）

徳田武「『在臆話記』の広瀬旭荘記事：『日  
間瑣事備忘』の顕彰」（『江戸風雅』12、2015、  
44-49、査読無）

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020653314>）

徳田武・神田正行・小財陽平「広瀬旭荘の  
林外・青村宛て書簡」（『江戸風雅』13、2016、  
47-94、査読無）

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020848718>）

〔学会発表〕（計3件）

小財陽平「廣瀬淡窓と菅茶山の詩風につい  
て」（「平成26年度咸宜園教育研究センタ  
ー定期口座」〔招待講演〕2014.10.9、日田  
市民文化会館「パトリア日田」スタジオ1  
〔大分県日田市〕

徳田武「大坂における漢文学と俗文学の交  
流：中井履軒・頼春水・与謝蕪村・上田秋  
成・角田九華」（日本漢文学プロジェクト  
共同研究チーム、大阪大学大学院文学研究  
科日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネ  
ットワーク構築クラスター（国際古典籍学  
クラスター）〔招待講演〕2016.1.22、大阪  
大学〔大阪府吹田市〕

徳田武「広瀬旭荘の『観瀑布図誌』に就い  
て」（淡窓会、2016.12.3、二松学舎大学〔東  
京都千代田区〕

〔その他〕

ホームページ等

<https://blogs.yahoo.co.jp/bukou2007>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

徳田 武 (TOKUDA, takeshi)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進  
員

研究者番号：20139447

### (2) 研究分担者

小財 陽平 (KOZAI, youhei)

明治大学・法学部・専任准教授

研究者番号：00633314

神田 正行 (KANDA, masayuki)

明治大学・法学部・専任准教授

研究者番号：70586958